

## 1. はじめに

今回、シンガポール国立大学（NUS）医学部にて、2週間シミュレーショントレーニングプログラムに参加しました。はじめに、本プログラムを作って下さった秋山先生や多くの先生方、留学の準備から大変お世話になりました医学教育推進課の皆様、留学の予習を手伝って下さったシミュレーションセンターの皆様や友人達、支えて下さった倶進会の皆様から心より感謝申し上げます。

## 2. 応募理由

私がこのプログラムに応募した理由としては、①最先端のシミュレーションセンターにて様々な手技を経験したい、②プロフェッショナルリズムに特化した講義やシミュレーションを経験したい、③海外の医学部生がどのように学んでいるのか、日本とどのように異なるのかを知りたい、④将来、研究での留学を漠然と考えているため、英語力を向上したいということが挙げられます。

## 3. 実習内容

NUSには1学年で300名いるので、5つのクールに分けて、1クール60名で実習を行っていました。シミュレーションではその中で6~8グループに分けて、それぞれシミュレーションの内容が異なるブースに行き、ローテーションするというシステムをとっており、毎回少人数でトレーニングをすることができました。内容としては多岐に渡りますが、主に様々な手技やBCLS、ACLS、院内での急変患者の対応、様々な状況下での患者やその家族への説明のシミュレーションを行いました。様々な手技の詳細としては主に、①NGチューブ挿入・輪状甲状靭帯切開、②ステイプラーやドレーンの扱い方、③ルート確保・静脈採血、④血液ガス採取・インスリン投与・モルヒネの希釈、⑤尿道カテーテル挿入、⑥エコー操作、⑦気管挿管、⑧胸腔穿刺、⑨腰椎穿刺、⑩中心静脈穿刺、⑪縫合となります。それぞれのブースにマネキンがあり、患者やその家族への説明では役者を相手にシミュレーションを行いました。日にもよりますが、1日の大まかな流れとしては午前中にレクチャー、午後にシミュレーション、夕方からその解説という流れでした。あらゆる手技を効率よく経験できるように、シミュレーションではスケジュールがかなり細かく設定されていました。また、実習では必ずフィードバックの時間が設けられており、生徒達は積極的に質問し、意見を言っていました。

## 4. 生活

NUSの学生寮が空いていなかったため、都心にあるチャイナタウンのホステルに泊まり、

地下鉄で通いました。シンガポールは地下鉄が発達しており、また非常に安価で、大学もホテルもそれぞれの最寄り駅から徒歩 2 分ほどの立地だったので、通学も快適でした。授業が早く終わった日の放課後や、週末には NUS の学生達と観光を楽しみました。また、シンガポールは物価が高いイメージでしたが、様々な場所にあるホーカーズと呼ばれるお食事処では非常に安価に食事ができました。

## 5. 総括

2 週間という大変短い期間でしたが、学ぶことは多かったと思います。まずは、胸腔穿刺、腰椎穿刺、中心静脈穿刺は臨床実習で見学したことしかなかったので、実際にシミュレーションできたことは良い経験になりました。また、患者の全身管理や初期対応などの方法は日本の実習や講義でも学びはしますが、実際にシミュレーションで時間制限の中でやるとなると、大変難しく感じました。急変患者への対応のシミュレーションでは、患者やその家族への説明、上級医への申し送り、ルート確保、血液ガス検査用の採血や、薬剤の投与量・投与方法の提示まで行う必要があります、かなりリアルに近い状況が作り出されていました。

また、日本では主に初期研修医の到達目標であるプロフェッショナルリズムを、NUS では学生のうちから詳しく学び、役者に対してのシミュレーションで実践する機会が与えられており、実際にほとんどの生徒があらゆるスキルを用いて病状説明をしていたのが印象的でした。設定状況は様々で、具体的には、待ち時間が長くて患者が怒鳴り込んできた状況や、親族の突然の死を伝える状況、娘の中絶に母親が反対している状況、夫から DV を受けている妻に問診をする状況、患者がタイに性転換手術をしに行こうとする状況など、多岐にわたりました。シンガポールでは日本でいう初期研修医の期間が 1 年間しかありませんが、学生のうちにここまでリアルに近い状況でシミュレーションできれば、スムーズに働き出すことができるであろうと感じました。

次に、シンガポールの医学部生がどのように学んでいるかについてですが、医学部は 5 年制となっており、一般教養がなく 3 年生から 3 年間病棟実習を行います。病棟実習の内容はそれほど日本と変わらないようですが、違いとしては患者さんのルートをとったり、採血をしたりすることまで学生がやるということでした。最終学年の 2 月には、各診療科の記述式の試験と、PC で行う択一試験、OSCE があり、OSCE では役者でもなく、実際の患者に対して説明や手技を行うとのことでした。2 週間彼らと実習を共にやってみて、ほとんどの人が積極的に実習に取り組んでいる印象を受けました。質問が出ないときはなく、みな先生の話を持携帯の電子ノートや手帳にメモしていました。

本プログラムでは、自分の医学的知識や英語力の無さを実感する場面も少なくありませんでしたが、海外の医学部生たちとお互いのことを理解して刺激し合うことで、間違いなく今後の医師としての人生におけるモチベーションになったと考えています。この経験を忘れることなく、今後活かしていきたいと考えています。このような貴重な機会を与えてくださった、このプログラムにかかわった全ての方々に、再度御礼申し上げます。